つくしだより

平成26年12月号

東京都精神障害者家族会連合会
（東 京 つくし会）
〒156-0056 世田谷区八幡山
3-33-1 林マンション301
TEL/FAX:03－3304－1108
http://www4.ocn.ne.jp/~ttsukush/
発行者 眞壁 博美
2014．12．15 第293号

2014年みんなねっと 関東ブロック大会 in 神奈川

都連副会長 本田 道子

深まり行く秋の気配を身体中で感じながら横浜「みなとみらい」駅で下車し一歩を踏み出した私達は本日の会場「はまぎんホール」をめざし歩き始めます。枯葉の舞う横浜美術館がすてきと思いながらほどなくランドマークタワーが見え、とそのすぐ前に「じんかれん」のスタッフが待っていてくれました。来年は東京が担当です。10月16日（金）有楽町「朝日ホール」です。

「はまぎんホール」は1階にありロビーでは受付と作業所作品のバザーも用意されておりました。また本日は「第41回精神保健福祉神奈川県民の集い」と合同開催でもあります。

10時からの開会式では「じんかれん」の理事長堤年春氏のご挨拶の後、神奈川県知事黒岩祐治氏、みんなねっと理事長本篠義和氏のご挨拶がありました。本日のテーマは「地域で暮らすために今必要なこと」でプログラムは4部仕立てです。

第1部 講演

＊「地域精神医療のあり方」

講師 伊藤順一郎氏（国立精神神経医療センター精神保健所社会復帰研究部部長）

＊「一人暮らしを踏み出すために」

講師 池淵恵美氏（帝京大学医学部精神神経科学講座主任教授）

第2部 対話

伊藤、池淵両氏によるトークで会場からの質問用紙に回答という形で行われました。

第3部 紹介

本篠義和氏が「英国版メリデン訪問家援」について説明しました。

ロビーでは、社会保険労務士による相談も設けられておりました。

私は伊藤・池淵両氏の講演は初めてでしたのでとても楽しみでした。今回強く印象に残ったのは「一市民として」ということばです。医師、本人、家族、支援者、というくくりではなく同じ地域に生きてゆく「一市民」として精神保健と向かい合ってゆく、という基本的な考え方についてです。医師もともすれば目の前の患者本人しか診ないで治療しようとする。でも同じ地域にいる一市民という視点でその本人をみるとき、家族のこと、学校や仕事のこと、住まいのこと、などなどその人の後にあるものがみえてくる。家族も力をつけて医療者と協力して治療に一緒にあたってゆくシステムを作ったり、家族も一市民としての対人スキルを使って地域力をアップさせる活動をしたり、一市民としての家族の力に期待している、というお二人のことばでした。我々家族の一市民としての成熟も思いながら「白衣を捨てよ町に出よう」と書かれた医療者であるお二人の思いも戴きました。

閉会式では来年の開催となる都連が紹介され、ピンクのキャップをかぶった都連役員が横断幕をもつデモンストレーションが披露され、眞壁会長が「有楽町で会いましょう」と呼びかけ、来年への期待を募らせました。

北区飛鳥会の紹介

事務局長　吉田　耕一

飛鳥会は北区の西ヶ原にある西ヶ原病院（精神科の単科病院）の患者家族を中心に精神科医、ワーカー、保健師などの支援を受けて昭和四十九年に家族会活動を始めました。

今年で活動を開始して四十年が過ぎ、先日、記念式典・祝賀会を行いました。（つくし会の眞壁会長にも、お忙しい中ご出席頂きました。有難うございました。）

飛鳥会の活動初期の十年くらいは井戸端会議のように家族同士が話しあいをすると言う家族会の原点と言える活動を中心に、在宅の当事者が病院と自宅の往復をする時くらいしか外に出る機会がない事から、少しでも生活の中に楽しみをと映画上映会などを企画していました。

そのような中で日本全体に作業所が少しずつ出来始めた事から、「北区にも精神障害者の作業所を作ろう」と言う機運が高まり、医師、病院ワーカー、保健師、家族、地域関係者など様々な立場の人たちが集まり、「ワークインあすか」（昭和六十二年設立）を立ち上げる事となります。

「ワークインあすか」を作る時は、なかなか場所が決まらずに、ご家族の方は大変な苦労をされたのですが、西ヶ原地域で皮膚科・精神科を開業されていた吉住五郎医師が所有していた建物を破格の家賃で提供してくれた事で、開設に漕ぎつける事が出来ました。

「ワークインあすか」は自宅でも無く、病院でも無い地域の中の居場所として利用され始めます。平成二年には今度は「障害当事者が働ける場を作ろう！」という事から、飛鳥会を中心に「第二ワーク・イン・あすか」を設立します。この時も吉住先生にはお世話になりました。同じ時期に歩いて数分の場所に「つばさ工房」と言う作業所も設立され、現在は飛鳥会の事業所として一緒に活動を続けています。

その後はグループホームを開設し、区から地域活動支援センターを事業委託。そして今年、指定特定相談支援事業を立ち上げました。

グループホーム開設時は実績が無い事から1年目は補助金が出ずに家族の方たちが手弁当でホーム職員となり実績を重ねながら、駅前等で署名を集め、専門職はエビデンスに基づいた資料を作成し、超党派の議員に働きかけたことで翌年度には全会一致で補助金が出る事になりました。

地域活動支援センター（当時は精神障害者地域生活支援センター）についても医師、保健師、家族、病院ワーカー等々、様々な立場にある人達で構成された準備委員会を立ち上げ、開設にむけて動きました。

現在の飛鳥会は家族会活動、B型事業所3ヶ所、グループホーム11部屋、地域活動支援センター、指定特定相談支援事業所と活動が広がってきました。飛鳥会の歴史はまさに日本の精神保健福祉の変遷と連動しながらだったなと改めて思います。そして同時に、どの時代にも家族だけでは無く、様々な立場の人たちと一緒になって活動をしてきたことで、飛鳥会は家族の為だけの会では無く、地域にとって大切で必要な社会資源としての役割を果たしてきたと思います。

今後は五十周年を目指し、様々な経験を積んできている家族の方たち、障害当事者、職員と協力しながら、北区にとって必要な社会資源で有り続けていきたいと思います。

家族会紹介

稲城市・稲穂会の紹介

会長　井上　惟

稲穂会は、今年11月に会員が30名になった小さな家族会です。毎月、役員会（第３木曜日）、定例会（第４月曜日）、家族相談会（第３土曜日）の３点セットを活動の基本にしています。

・役員会は、毎月、定例会にかける議案検討、会員の皆さんの抱えている問題整理の他、大きな行事について、会場の予約、交通手段、市の広報等への掲載依頼、チラシの作成・配布等について企画して、役割分担の原案を考えます。

・家族相談会は、市内外のご家族からの申込みに対して、役員が面接してご相談にのっています。

・定例会の参加者数は、通常10～13名です。「語らいの会」と「学習会」を２本柱にして、毎月実施しています。「語らいの会」では、ご家族と当事者の現状について、お一人ずつ話していただきます。ご家族によって、それぞれ状況が違いますが、話し合いの中で、励まし合い、知恵を出し合いながら、和やかな雰囲気の中で行われます。

「学習会」は、今年は８月に、市の高齢福祉課地域支援係の職員さんを招いて「地域包括支援センター」の活動について話していただきました。また、障害者用ヘルプカードの活用や、災害時要援護者登録制度の利用について学びました。

年間の主な行事は、４月の総会、６月の見学会、７月と11月の稲穂会主催の公開講演会、10月～12月のコンボと共催の「家族による家族学習会」（全５回）を実施しています。

・６月の見学会：今年は千葉県流山市にある「ひだクリニック」に、市庁バスを使って見学してきました。クリニックを核に、当事者の自主性を生かした様々な日中活動（デイケア、ナイトケア）、多様な就労支援事業等々、当事者の方々のイキイキした姿が印象に残りました。

・公開講演会：年２回実施しています。今年の７月は、多摩市の病院の医師をお招きして、「統合失調症の特質と対応の仕方」について、新しい知見を学びました。11月は、ＳＳＴリーダーとして著名な高森信子先生をお招きして（今回で３回目）当事者に対する家族の対応の仕方を、参加者の中から出された具体例をもとに、全員でロールプレイするなどして、貴重な勉強をしました。

・家族による家族学習会：今年で５度目です。テキストの読み合わせとご家族の体験をもとにした話し合いを重ねて第３回を終了、続行中です。

・その他、社協・地活主催のバーベキュー大会への参加：10月に多摩川の川原で行いました。忘年会：12月にカラオケ店で大いに盛り上がる予定です。

今年特筆すべきことは、６月実施の会員へのアンケートをもとに、市への要望内容をまとめ、市長宛に要望書を提出できたことです。東京つくし会の呼びかけにも対応できました。今後、市内の障害・福祉関係諸団体とも交流して、活動の輪を広げていきたいと考えています。今後の活動として、低年齢の精神障害者を抱える若いご家族への呼びかけをどう行うかという、大きな課題があります。

西地域ブロック会議報告

都連理事　鈴木　孝男

平成26年11月22日（土）東京都障害者福祉会館にて、あかね会、藍工房家族会、豊島家族会が当番家族会で22名の参加者で眞壁新理事長挨拶で開催された。

議題は①みんなねっとのアンケート調査②都連活動の経過報告③東京都精神障害者家族会連合会の名称変更④西地域ブロック会議ホームページの進捗状況と修正⑤東京都及び都議会政党への要請行動の報告です。

単会報告では、つばさ会：新設障害者サポートセンターに家族相談の設置が検討中。かもめ会：相談で退院後家族と別居した生活の方法はないかとの相談が多い。藍工房家族会：世田谷区の3家族会で初めて対区交渉を行った。豊島区家族会：当事者が在宅の家族がほとんどである。懇親を主に活動。あかね会：家族会でバザーがあり地域との交流を兼ねた活動をした。太陽の会：福祉手当問題が区議会で初めて取り上げられた。区の障害者連合会運動会に参加。世田谷さくら会：夏苅先生の講演会が盛大であった。ゆる親の会（新宿区の発達障害者の親の会）：発達障害の子供の親だけでない親の参加もある。新宿フレンズ：ネットを媒体とした家族会で新宿区民のみならず、ネット上で全国的である。

以上、精神障害者が特別視されている実情が訴えられ、今後の活動展開の課題が述べられた。

☆賛助会費☆（敬称略）

ちひろメンタルクリニック　５０００円
前田克実　２０００円
ありがとうございます。

☆講演会のお知らせ☆

☆1／10（土）「イギリスの家族会から学ぶメリデンプロジェクト」
講師：都連副会長、みんなねっと副理事長
松沢　勝氏、家族（ＰＳＷ）市川　俊朗氏
主催：新宿フレンズ　TEL:03-3987-9788
※参加申込み・お問合せは、主催者までお願い致します。

東京つくし会電話相談室

東京つくし会の理事が交代でさまざまな相談に応じています。

電話　03－3304－1334

毎週水曜日（祝日は休み）
11：00～16：00

※当相談室は、面談による相談はお受けしておりません。
また、相談の内容によって、別途お時間をいただくこともあります。

編集後記

みなさんは97対3と言う数字を聞いたことがありますか。私は全国精神障害者地域生活支援協議会「あみ」の代表理事伊澤雄一氏の講演をお聞きして、大きなショックを受けました。平成十七年度のデータということですが、日本の精神医療福祉の費用配分のことです。医療費と保健福祉費の割合が97対3になるというのです。いかに医療に多くのお金が使われているかが分かります。ちなみに先進諸国では医療費と保健福祉費の割合は、15～40％対85～60％と大きく逆転しているそうです。しかも日本では、この医療費のうち74％が入院費に使われているというのです。

厚労省は平成十四年、35万人の入院患者のうちの社会的入院患者7万2千人を退院させると発表しました。しかし平成二十六年現在でも、発表前とほぼ同じ30万人を超える人が入院しています。

私の息子も長期入院患者の一人です。病状もよいときと悪い時があり落ち着かないのですが、地域の受け皿が充実していれば、地域で暮らせるのではないかと痛切な思いを抱いています。

都連理事
松原のり子

つくしだよりは赤い羽根共同募金の配分を受けて発行しています。